The JIMMIN-SHIMBUN
(The people's newspaper published every ten days)

The JIMMIN SHIMBUN
Tenmabashi-Kaikan. 2F
3-5-28 Tenmabashi
Kita-ku, Osaka, JAPAN
Tel. 06-358-4376

Subscription :
One year 10,000 Yen
(include air mail postage)

人民新聞

1991年 1月5日 通巻第738号
1968年12月12日第三種郵便物認可 5、15、25日発行
発行所 人民新聞社
1部150円 購読料半年間3000円
本 社 大阪市北区天満橋3-5-28 天満橋会館2階
☎(06)358-4376 FAX(06)358-7555
振替口座大阪5-88555
東京多摩支局 立川市柴崎町3-6-3 風林舎内 ☎(0425)22-5429

アラブの同胞よ。
これは、運命と威厳をかけた戦闘である。
ここパレスチナでは、
パレスチナ人の子供たちは、
アラブの油田と金では達成できなかったことを、
自らの英雄主義と犠牲をもって達成しようとしている。
この聖地で、
新しいアラブ人が育まれている。
この新しいアラブ人は、
祖先の栄光を堅持し、
名誉ある未来を掴み取ることに全霊をかけている。
（パレスチナ民族統一指導部アピール62号）

世の流れがずい分早く目まぐるしくなって来たように思える。情報伝達手段の奇型的な変化がこれを促進しているようだ。今年もくるくるドンドン変わるだろう▼ヤブ医者ほど症状に目をとられ症状に対応して処方箋を乱発、薬の山を築き人の死を早めるという。あげくの果てに人を殺して臓器を移植するような馬鹿事にうつつをぬかすことになる▼何のことはない、原因があるから結果があるのだ。原因を把握せず対症療法や対応解釈や思いつきやこじつけで原因の解明ができるはずはない。目先しか見えぬ者にも鼻先があり、守銭奴にも死が。人は死んでも世は続くことを知るべきだろう▼国の境は取り除いても、国名は変えられても世の貧困と抑圧はなくせまい。貧困と抑圧がある限り反抗し解放を願う人々の闘いは止むはずはない。今年も世界のいたる所で目に見えぬ人民の闘いが一段と激しくなるだろう。老兵はバタバタ出来ぬがまだまだ闘うぞ。（老）

ぷりずむ

「自己のモノ」のために「自己」を見失ってしまった日本人。「自己のモノ」を追い求める余り世界を見失ってしまった日本社会。海へと突進する鼠の大軍の如く消費への疾走は続く▼いつしかその資本主義の速度に足をとられ、気付かないまま同じように走り始めてしまった「社会主義者」達。そして、自己喪失を社会主義の敗北とイコールで結び安らかに変節をとげていく▼労働日短縮をめざす工場立法が議会に上程される必然性と、それが完全に骨抜きにされざるをえない必然性の中に資本主義の本質を見たマルクス。今土地保有税が議会にかけられんとする過程を眼のあたりにし資本主義の本質に変わりのないことを思い知らされる▼その本質を思い知らされ続けてきた人民の中にのみ力は蓄積され続けている。創造への道は見えざる力を見うる思想によってのみ開かれる。（M）

統一地方選挙の年である。地方では与野党馴れ合いの構造が生む首長や議員の不正が暴かれ、住民の怒りが行政を揺るがしている▼不正の根源となる開発の波で過疎が一転リゾート開発の渦の中。増加する中年の過労死とリゾート地を闊歩する若者たち。「豊かな日本」の内実は背筋を冷たくする▼我々もまた目先の対応に必死になっている間に道を外れ、懸命にやる程、壁にぶつかる▼「量から質へ」の転換と世間でも言われ始めた。「量」は判るが「質」となると各人各様の理解で、質の質が問われる▼日常性からの脱皮は自己を制御、改造する所から始まる。自らの意識の変革が接する人々を変え周囲を変える。単に体制を変えれば人を変えられると考えるのは支配者の思想だ▼統一地方選挙、議員一人二人の力では何程の事もできない。しかしそれを生み出す住民の怒りの結集と共同行動の進展が、地域の活動に新たな変化を促す。一歩前進へ。（H）

議会と市民運動が車の両輪に――そうなったときに日本の民主主義が確立する

▼槌田劭さんに聞く

今春、統一地方選が実施される。本紙では昨年、新たな政治主体形成の動きとして、市民運動と政治との関わり、その一つとして、各種選挙への取り組みに注目してきた。無論、選挙が政治の全てではない。が、地域で力を蓄積し現状の変革を目指す人々にとって、地方選は絶好の舞台であり、試金石でもある。今号から連載で、統一地方選に向けた具体的な動きを紹介していく。第一回は、問題提起も兼ねて、京都での取り組みを、市民運動家で大学教員の槌田さんにインタビューした。（文責・編集部）

民主主義、本来のやり方の選挙を目指して

――まず、統一地方選挙に向けた京都での動きからうかがいたいと思います。

【槌田】今僕は、伏見区から、「みみずの学校」を主宰してきた高橋幸子さんを市政に送り出そうという呼びかけをしています。今までとは違う選挙スタイルで挑みたい、「出たい人より出したい人を」ということで、伏見区民二〇〇人、区外の人二〇〇人に輪を拡げようという運動です。

まず、候補者作りからみんなでしようという主旨で、どこかの都合で、誰かの考えで、あてがいぶちで候補者を作るのではなく、みんなで候補者を作ろう、候補者が決まったらみんなで考え方も作ろうと、そういうふうにしたわけです。

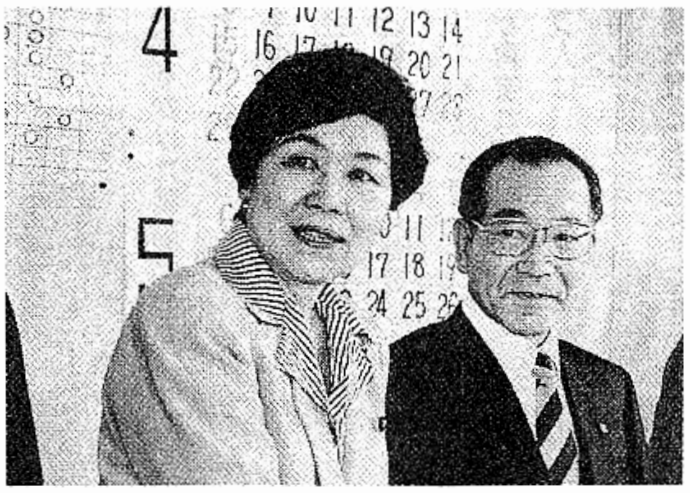
財政の保障も全てカンパで賄う。候補者が組織の心配や金の心配をするとか、ましてや金を用意するとかいうようなことは一切してはいけない、すべきではない。それをすると、候補者が金に、組織に卑屈になってしまいます。だから、担ぎ出している我々がその責任を負う。候補者は、当選の後も、自分の見識で一切動けばよろしい。その見識をより豊かにする、或いはその見識で動くことを支えるようにすることが、出した者の責任だということです。民主主義は本来そうでなければならないと思うのです。

市民運動の側に政治への嫌悪がある

市民派は――市民派という集団があるわけではありませんが、市民運動に関わっている部分は、それぞれ課題を持っていますから、政治的という意味ではすぐれて政治的ではあるけれども、個別の課題をシコシコとということで、トータルな問題を見るということに関しては、だいたい忌避する傾向がありました。それが嫌だから個別課題をシコシコやるんだ、というところから七〇年代がスタートしていると思います。

その間に確実に政治状況は悪くなっており、もうすこし自分の課題と他の課題とをつないでいくことが、市民運動の広がりにとっても大切になってきています。俺はこれの専門家だと、これは要素還元主義という科学主義ですが、それでは今の時代の問題には対抗できない。今度の選挙で問われているのはその点だと思います。

それだったらいい政党を作ればいい、ということになるわけで、それを試みた人もないではないけれども、運動全体が成熟していないところで、形だけ先に作れば何かが始まるという考え方もおかしいわけです。僕はそういうふうに考えない方が良いと思います。と言って、受け皿があるのかというと、革新政党の中に受け皿はあるとは言えない。僕は、革新政党の中に受け皿があれば本当にいいと思うし、社会党を応援したい。特に土井社会党は応援したい。応援と言うよりは、一緒にやりたい。車の両輪のように協力しあえたらいいと思っています。



土井社会党は応援したい

だけど、いくらそう思っても、市民運動の側に政治忌避、嫌悪がありますと言うと、大状況から引き回すという経験で、アッモノに懲りて今ナマスをふいているような経験保持者と、それから、正義をふりかざして人を傷つけることに懲りて、ナマスを吹いている人が多いわけです。金権や、正義をふりかざすという組織の利益、つまりのぎへんの「利」には懲りたと……。現実にはその二つがないと選挙はできないことになっています。「地盤・看板・カバン」の政治がまさにそれです。それが嫌だという嫌悪感があって、みんな離れていく。誰もやりたくないわけです。

だからと言って、社会党に代わりにやってくれと、外側から責任もとらずに期待だけを寄せたところで、何のつっぱりにもならない。社会党は労働組合丸がかえでしか動けない構造を持っています。マルクス・レーニン主義とはおよそ遠いとは言え、その尻尾を引きずったようなところを持っています。その状態を突破するためには、土井社会党の雰囲気が、本当に市民権を得ていかないといけないけれども、申し訳ないことに、我々の方に力がない。そういう政治訓練もされていない。

利益の「利」ではなく道理の「理」を基礎に

だから、どこかで政治訓練をし、突破口を開く必要があります。政治は嫌だと避けているけれども、実は力がないからやれない、やれないことをやるのはシンドイからまたやらない、というふうに言い訳として政治を嫌悪しているのが現実だと思います。その力を作らないといけない。のぎへんの利ではなくて、市民運動に根ざす道理の理で市民運動が展開し、しかも協力し合えば、独自でも選挙で勝てる、その上で、社会党とも一緒に手を結ぼうと言えば、これは初めて力になります。自立した力をつけて初めて共同の関係が成り立つのに、自分達には力がなくて忌避だけしている中で、政党ににじり寄ったら、政党の側も迷惑だろうし、期待だけ持ってその期待と違うからと言って、いちいち政党にケチをつけるようなことをしていたら、それは建設的提案にはなりません。

僕は社会党に期待を寄せているし、もっと言えば共産党にも期待を寄せたい。

四年前の統一地方選挙の時と、今度の統一地方選挙と質的に違いがあるのは、金・組織というのぎへんの二つの利について、この間大きな経験をしてきたことだと思います。リクルートの問題で、構造的にとことん腐敗した財・官・政の三位一体の癒着の構造が明らかになったし、一方では、正義をふりかざし、この路線で革命がおこるんだと、これに従わんのはみんなケシカラン奴だと叩きのめしてきた正義も、雪崩を打って崩れ始めました。この状況の中で僕らが何ができるのかという問題が、今問われているわけです。

だから、共産党にも僕は期待を寄せているんです。共産党も、自分の組織の利でだけ振る舞うのではなく、みんなと一緒に手をつないで拡げていこうというふうになって欲しい。僕は、社会党、共産党が、いい意味で手をつながないといけないと思っています。社会党と共産党がいがみあっている現実があれば、自衛隊の海外派兵の問題だって、一旦引っ込んだけれども、必ず出できます。二〇世紀最後の一〇年の間に、おそらくあれは完成すると思います。今のままだったら。だから、社会党や共産党を支持する人たちが、本当に協力しあい手を結ぶ関係を、二一世紀には実現しないといけないんです。

二一世紀を射程に入れて力を蓄えよう

この議論は当然反発を呼ぶ議論です。特に、あえて挑発的に言えば、正義にいびられ、正義の御旗で叩きのめされ傷ついた経験を持ち、今ナマスを吹いている部分にとっては、共産党と手をつなぐなどという議論は、絶対に通らない議論だと思います。今現実に通らないです。僕がいくら社共は手を結べと言っても、観念的ですし、どちらからも、そんな議論は歓迎されていません。

今は無理だけれども、僕は二一世紀にはその射程を持たねばいけないと思います。しかもそれは社会党と共産党が組織の利害、損得バランスで手をつなぐのではなく、道理によって合体せねばならないと思うんです。多様な物を認め、違った考え方と手をつながない限りは、経済的損得の世界には勝てない。僕はそれを二一世紀の課題としなければいけないと思っています。二一世紀にその課題を実現しようとするならば、二〇世紀の最後の一〇年の間に、市民派と言われる部分が、のぎへんの利ではなく道理の理の一致によって動けるのだという力を蓄えて行って、共産党や社会党に期待を寄せている部分といい関係を作り、その間をつないでいくことによって、現実的に足枷手枷となっているものを越えていかねばならない。

社会党は55年体制から抜けていない

――昨年一年の社会党とのつきあいの中で、その意味で何か変わったという点はありますか。

【槌田】社会党は結局、五五年体制政党だという限界を越えていないということです。僕らは、五五年体制を越えて二一世紀の体制を模索すべきだろうと思います。五五年体制を越えていないと言うのは、極めて率直に言えば、のぎへんの世界から抜けていないということです。

衆議院選挙でも、要するに議員は何のための議員かと言うと、支持者の利害なんです。議員を持っていなかったら相手にされないから議員を持たねばならない、というのぎへんです。現実に市長選挙の時でもそうですけれども、お金を動かす力は我々にはなかったわけです。議員も持っていない。だから、あいつらはどうせ何もできないとしか見られていなかったと思います。政策やその他の動きについても、僕らはかなり一生懸命協力したけれども、力がない現実は思い知らされたし、

（三面上段につづく）

月刊 ほん・コミニケート
あなたの知らない本の世界がある
■月刊 ほんコミニケート は少部数出版物の情報誌です
■新刊情報、書評・紹介、ほんの周辺情報などを掲載
■手に入りにくい本の情報を多数収録し、また読者の購読注文にすばやく応じることができます。
●A5判16ページ 1部250円
年間購読料3600円（送料・目録込）
●年一回程度「取扱い出版物目録」（3～4000冊を収録）を発行。（現在89～90年度版発売中：1部600円）
■見本誌進呈します■
定期購読のお申し込みは
ほんコミニケート編集室へ
☎03-368-4160
〒169 新宿区百人町1-15-24 OSセンター210
ほんコミ誌・目録掲載の本は注文できます。
ほんコミニケート社へ
☎0422-46-8120

91統一地方選 私達はかく闘う ①

誰かが傷つく覚悟しないと状況は突破できない

（二面よりつづく）力がない故に、結果的には、選挙事務所でもいわばお客様にならざるを得なかった。

例えば、僕らが一緒にやっている僕らの代表である市会議員や府会議員を何人か持っていたら、無視は多分できなかったはずです。無視できない影響力、発言権を持って道理を語れば、初めてその道理は貫けます。決定権にならないまでも、無視できない形でいくらかの影響はでてくる。しかし、いくらいいことを言っていても、僕ら自身がそういう力を持っていなかったら、無理です。僕ら自身が政治を全て支配しようなどというのは思いあがりもはなはだしいし、そんな力は将来ともないだろう。だからそういう点で言うと、現在の既成の政治をよりよくすることに貢献し、よりよくなったその部分が政治を担ってくれる、そういう意味で、基本的に政党政治そのものを否定する理由もないし、民主主義にとって政党は大切だと思います。しかし、だからと言って、政党に片想いを寄せ、過大な期待寄せたり、政治を忌避して逃げたりしていてはいけない。その間は矛盾するし、当然揺れます。その揺れの中で学習しなければならない。

そこで伏見の問題に戻って言うと、高橋さんと身近な人たちほど、出ると決まったら応援するけど、自分たちが担ぎあげて、高橋さんが傷だらけになるのを見ていられない、と言う側に回っています。僕も高橋さんとは長いつきあいだから、本当はそう言いたいわけです。だけど、その姿勢そのものを、今僕ら自身が越えねばいけないのではないか、誰も傷つかずということだけでは状況を突破できないと思うんです。担ぎあげられても傷はつくし、担ぎあげる側の中心になっても傷つきますよ、これは。だけどそれをやっぱりやらないといけない。

選挙と言うと、金が用意できるのか、応援する組織はあるのか、ということを、必ず先に聞かれます。どこでも。それほどそれは一種の信仰になっています。これが、さっきから繰り返し問題にしているテーマであるのぎへんの政治に流れていく絶対の理由です。そうではなく、手弁当で、ないならないでやってみようよ、と言うことでやるんですが、準備が悪いとこれで負けるんです。それで負けを重ねていると負け犬になる。今、京都はそういう状態にあります。

伏見で二〇〇、それを包み込んで四〇〇人の支持者を集める、というのは、出る以上は勝たねばならないし、負けるにしても無残な負け方をするとチリヂリになるのに対して、楽しかったしやれたと、もうひとフンバリやったらいけたのに、ひとフンバリたらなんだなあと、他人ではなく自分を振り返るような雰囲気の展開になったら、絶対力になる。そこで学び取った政治教育によって、のぎへんを拒否し、道理の理を打ち立てるのだという雰囲気が出てくる。日本の民主主義がそうなった時に、その上で政党政治が実現したときに、民主主義は確かなものになる、と僕は思っています。

力をあわせれば勝てるという事実を示したい

そのためには、まず高橋さんを立てて、その状況に風穴を一つ開けて自信をつけたい。今京都では自信がない。勝ったという自信がない。前回の左京区では、社会党の公認を取ったから勝ったというふうになっているわけです。僕は、社会党の公認を取らなくても、本当にみんなが心を寄せたら勝てるんだという事実を示したいんです。

これは、何も社会党と対立するつもりでは全然ありません。先方はどう思うか知りませんが、僕は社会党は大事だと思います。だからこそ、僕らにもそれだけの力があるんだし、またやればやれるんだという上で、対等な関係を作らないといけないと思うんです。道理を語り、のぎへんでやらなくても勝つだけの力を蓄えつつあるぞ、蓄えてきたぞ、ということを、本当に事実でもって示すことができない限りは、僕らがいくらいいことを言っても書生談義、現実を知らないお遊びだということになる。

京都だけではなく全国の市民派がその段階に来た

それをそろそろ越えねばいけない段階に来ていると思います。リクルートの問題、消費税の問題でも、結局は僕ら自身が力を持ち得なくて、社会党に期待を寄せ、全部議会政治の枠内に問題を矮小化してきた。もっとゲリラ的に徹底した市民的運動で展開して、それを補強するものとしての議会と考えたらよかったんだけれども、参議院選挙の議席だけで争って、とりあえず、参議院選挙では逆転した。二番煎じで衆議院選挙も、ということだったんですが、もう熱気はなかった。反省として言えば、熱気を持続させるためには、市民的な動きの中で徹底してコツコツと、イヤダイヤダとやり続ける、それしかなかったと思います。だけど、それは力がなかったからやれなかった。だから、議会の活動と、議会と共にある市民的な運動とが、まさに車の両輪になる状況を作り出さなければならない。政党政治と市民運動とが車の両輪にならないといけないのに、市民運動が小さすぎるんです。まだ。

▲

現状では、車の回転速度が違う。市民運動の方は、社会党は何もしないと言うけれども、選挙になるとやっぱり転がる。それに対して、その時になると、我々市民グループは全然動けない。社会党の方は社会党で、大きな機構を回転させる機構そのものが、実は彼らの足枷になっている。労働組合の利益窓口になっていることによって、一面魅力を失いつつ、魅力を失った代償として組織からの応援をもらい、大きな車を、不安定にも一輪車を回している訳です。それをそうではなく、やはり二輪車の構造で進まないといけない。

かなり、現在の構図を図式化してしゃべっていますが、そういう状況に今度の地方選挙はあると思います。おそらく京都だけではなく、全国の市民派の運動はその段階に来たと思うんです。参議院選挙でミニ政党を作ってやっても勝てません、それは。まだそこまで成熟していない。それを作りださなければいけないと思います。ミニ政党を作るにしても、金がない、組織はない、だから勝てるはずはないと、玉砕を前提として飛び出すわけで、それでは無理です。玉砕を前提とするのではなく、大同団結できると言うか協力しあっていくと言うか、そういういわば多様なものとの共生を市民運動は課題としてきたのですが、これはまだ成功していない課題で、経験を積みつつある課題だと思います。

僕らの運動はまだ思春期なのだと思う

——その意味では市民運動の側にも克服すべき問題が多いのではないかと思いますが……。

【槌田】問題はものすごくあります。だから、社会党の方も、市民グループを、特に京都では大湾選挙があったから、非常に猜疑心を持って見ているんだと思います。反省しなければいけないこととして言えば、片想いを一方的に寄せて、その片想いに応えてくれないからといって、結婚する前から痴話喧嘩をしているような話はほどほどにしなければならないと、僕は思います。だから、今度選挙をやる場合も、市民運動の連合らしいやり方、考え方で、縛り合わない、行儀作法を押しつけ合わない、やれることを持ち寄ってそれぞれ認め合う、という進め方をとらねばならない、と思います。これは共生の原理です。共生の原理に立つからこそ、例えば障害者福祉の問題、人権の問題もテーマとし得るわけで、のぎへんの論理の世界の中では、取り引きの問題として、人権・差別・福祉の問題がとり上げられています。

そうではなく、僕らは今、課題毎に色んな人がきている、それをそれぞれ認め合うという訓練をしつつある段階だと思います。四年前の左京区の市議選は、僕らにとっては政治訓練の第一歩でした。そして、市長選をやり大湾選挙をやり、これも政治訓練のいい勉強だったと思います。それまで選挙については何も知らなかったのが、その経験を通じて、選挙はこうやるのか、こんなふうになっているのかと、ある程度想像がつくところには近づいた。その意味では、僕らの運動はまだ少年、少女期に入ったところ、まだ思春期なのだと思います。

10年先のために今、何をやったらいいのか

動きとしては、一〇年の射程で物をみなければなりません。今のことで一喜一憂していてはいけない。争うというのは、今の問題で一喜一憂するから争いになるんです。今どういう関係ができるかではなく、一〇年先にどういう関係ができるのか、そのために今何をやっておいたらいいのかという問題として、今問題をたてなければいけないと思います。

自衛隊の海外派兵も、企業がまだ本当に賛成していないから潰れた。そんなことに税金を使われるよりは、国内で争わずアメリカの恰好をつけるために金だけだしておけばいいというのが、大企業の意向だったから、金丸や後藤田が寄ってたかって潰したわけです。今のところ、のぎへんの馴れ合いが、右から左までを貫いています。五五年体制というのは、経済戦争に突入していく翼賛体制ですが、その翼賛体制の構造が、三〇年余りたって、非常に牢固なものになっています。そこへ風穴を開けるのが今の時代で、風穴を開けうるとしたら、僕は、それはやはり市民運動の課題だと思います。

——どうもありがとうございました。

情況 新年号
十二月十三日発売（定価）九八〇円
特集「派兵」策動 その意味するもの
「加害者」としての「平和協力」小田実❖米国の一極覇権と自衛隊派兵 藤島宇内❖〈国連と憲法のイデー〉憲法・派兵と自衛隊 山内敏弘／PKOと日本の立場 北村泰三❖人質にならなかったアジア人 福家洋介❖市民と遊民の思想 久野収❖リベラリズムの再帰 市田良彦❖〈特別企画〉（インタビュー＋寄稿）ペレストロイカに抗して／カガリルツキーとモスクワ人民戦線 カガリルツキーほか……（定価）九八〇円
定期購読申込受付中 一年一二〇〇円・半年六〇〇円
東京都中野区東中野二丁目一六番一二号 電話〇三（三三六五）一四一一 ファクシミリ〇三（三三六五）一四一二
情況出版株式会社

フセイン大統領の手紙

――全世界人質解放前後のバグダッド

❶

平田伊都子
（写真・川名生十）

去る一二月六日、イラクのフセイン大統領は、イラク、クウェートに拘束・滞在させられている外国人全員の出国を認めるよう、国民議会に提案するとの声明を発表した。これによって湾岸危機の平和的解決にはずみがつくものと見られていたが、その後も、イラクと米国は外相会談の日程をめぐって対立、武力衝突の可能性も含みながら、湾岸状勢は一進一退を繰り返している。日本人「人質」解放交渉のため訪イしたアントニオ猪木議員に同行していたフリー・ジャーナリストの平田伊都子さんに、イラク現地の最新かつ生々しいレポートをお願いした。

① アンマン空港7番ゲート

一二月二日、バグダッドに飛ぶため、通称バグダッド・パーブ、七番ゲートをくぐろうとした時、カメラやビデオや録音機やらを抱えた報道陣のデッカイ固まりがドドッとなだれ込んできて、入口をふさいでしまった。そして、フラッシュとテレビライトの眩しい光りの中に、元ヘビー級チャンピオン、モハメッド・アリが登場した。

「何人の人質を解放できました？」、私は思わず叫んだが、アリは壁の一点を見つめたまま反応なし……。「君、知らないのかい？あいつは言語障害になってしまったんだぜ」、顔見知りのロイターの記者がささやいた。そして、無表情なアリを取り囲んだ報道団は到着ロビーに消えていった。

② イラク・エアー一七〇便

一日に一便、世界とイラクを結ぶイラク・エアー一七〇便は、二〇〇人以上を超す乗客で満席だった。そのうえ、パンがつまったダンボール箱をはじめ、制限をはるかにオーバーした手荷物が、機内を身動きできなくしている。

約一〇〇人が、北アフリカ、特にバシール・スーダン大統領が送りこんだイラク軍志願兵。カウンターでは割り込みをし、窓側の席に座りたいとだだをこねる、ルビーの指輪に大きいネックレスをしたキリスト教僧侶の黒い集団。ディプロマット・メール（外交特権郵便）の袋を抱えたフランス大使館員。チュニスから乗り継いできた、アラファト・パレスチナ大統領事務所の所員……。奇妙な集団は一時間半後にバグダッド入りをした。

一二月二日、「アジズ・イラク外相とベーカー米国務長官の相互派遣による直接対話」という米国提案をイラクが受け入れた日の事だ。

解放前の日本人人質家族とイラク雑誌記者会見記念撮影

「……ゲスト（人質）の事は、全世界の誰も彼もが頭を悩ませている大きな問題である。

彼等ゲストは戦争を望んでいない。しかるに戦争が始まったら、まっ先にこのゲスト達は殺される運命にある。その時にはもはやイラクを出ることはできないだろう。彼等は戦争に対し、全く責任はない。

この戦争は二つのグループの間で始まった。その一つは神のグループで、もう一つは悪魔のグループ……つまり、我々には神がついているが、彼らアメリカ側には悪魔がとりついている……」

「神は、必要な時のみ『ゲスト出国拒否』をお許しになる。今や、ゲストの出国をこれ以上ひき延ばす必要はないと判断した。数週間前までは、イラク軍の戦闘態勢は十分ではなかった。しかし既に我が軍は用意万端整った。ブッシュよ、いつでも来い!!……」

「国会の承認を得しだい、私はゲストが家族のもとに早く帰れるようお助けしたい。

ここで私は一言、長らく帰国をお待たせしたゲストの皆さんに、ゴメンナサイと言いたい。

と同時に、私は今一度、国会とイラク国民に注意を促す。戦闘準備の手を抜くな!!かれら外国軍隊はいまだにメッカとアラビア半島に居座っているのだぞ!!

警戒を怠るな!!もしかするとアメリカが提案している『米・イラク対話』はまやかしであるかもしれないぞ!!故に、我々は常に戦時下態勢にあることを認識していなければならないのだ。

我が神が、全てのイラク人を、アラブ人を、そして全世界のイスラム教徒をお守り下さるように……」

アリ・トルキー・オリンピック協会副会長が日本人人質解放を発表した瞬間

③ フセイン最高指導者の手紙

全世界人質解放の命令書ともいえるフセイン大統領の手紙がバグダッドで公表されたのは、一二月六日午後三時のことである。私は、イラク当局から指定された高級ホテル、パレスチナのベッドに寝そべって、ぼんやり色鮮やかなモスクのドームを眺めていた。

と、突然ラジオから厳かな声で「アッ＝ライース・ル＝カーイド」（アラビア語で最高指導者）の手紙なるものの朗読が流れてきた。

「……全世界の人質の解放を許す……」

私は飛び起きた。

「慈悲ふかく慈愛あまねき神の名のもとにおいて」というアラビア文の常套句に始まり、手紙の三分の一は修辞で飾った抽象的な作文が続く。

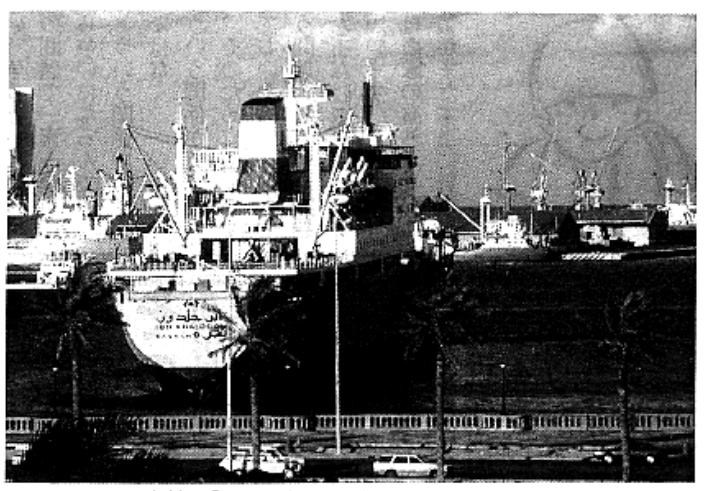
「四八人の盗賊」も顔まけの商売

朗読の手紙をテープにとり、急いでロビーに降りていった。昨日まで猪木議員に同行してきた六〇人の報道陣でごった返していたロビーも、五日夜八時四五分の日本人人質一部解放劇で一段落したのか、閑散としている。サアドゥーン・ショッピング・ストリートに出てみる。庶民の立ち食いレストランに寄ってみた。一年前に比べ三倍近くはね上がったアラビアン・チキンサンドをほおばる人々に聞いてみたが、「フセインの手紙」のことなど誰も知らない。外国人人質のことなど、話したくない、触れたくない、関心ない……という調子だ。

店先には、半年前にはとてもお目にかかることのできなかったロレックス、シチズンといった高級腕時計、イブ・サンローラン等の香水が並んでいる。イスラム教の国であるにもかかわらず、オールドパー、ウォッカ、ナポレオン等々がびっしり棚を飾っている。屋台の駄菓子屋には一本〇・二五ディナール（約一八〇円）のマルビド、国産タバコに混じって、最高級チョコレート「ゴジパ」がバラ売りされている（米国製マルボロ一箱は七ディナール）。

そして、ソニーのビデオ・テレビ、東芝のオーディオセット、イタリア製食器洗い機。「クウェート側から持ってきたんだから、品物に間違いはないよ」と、電気屋の主人は悪びれもせず自慢した。

サアドゥーン通りの名物「アリババと四八人の盗賊の像」もびっくりする商いぶりであった。



女性の「平和の船」イブン・ハルドゥーン号

④ フセインに手紙を書かせたのは誰だ？

バグダッド市民には届かなかった「フセインの手紙」は、その同じ頃、すでに世界中に届いていた。

そして、市民がひしめく繁華街をティグリス河で遮断した対岸のアル・ラシード最高級ホテル、別名「隔離ホテル」では、数日前から詰め込まれた世界中の報道陣が大騒ぎしていたのだった。

一体、いつ、何が、誰が、フセイン大統領にこの手紙を書かせたのか？

手紙に、「諸外国の人々、政治団体、とりわけヨルダン、パレスチナ、スーダン、北アフリカの兄弟たちとともに熟慮した上で、平和に向けての大出血サービス」という一節がある。

実際、一二月に入ってバグダッドは「平和のラッシュ」だった。

我等が猪木議員による「バグダッドが送る世界平和の声、祭り」。サウジの国境に接するイラク領内で、戦争阻止のためキャンプを張ろうという人間の盾志願の「湾岸平和チーム」。イラク機で同乗した行儀の悪いキリスト教指導者達による「キリスト平和会議」。イタリア国会議員団による「平和解決派遣団」。フランスの思想家、ロジャー・ガローディ氏による「平和講演」。世界平和評議会会長の「一週間平和訪問」。

そして六日には、ファトマ・アル＝ウーフィ・アルジェリア婦人協会会長が率いるイラク船、イブン・ハルドゥーン号が、その名も「平和の船」と名を改め、薬品、ミルク、食料、世界の女性平和団体を乗せ、アルジェを出港した。「平和の船」はチュニス、トリポリ……と寄港し、一二月二六日にはイラクのウム・カスル港に到着する予定だ。

戦争を思いとどまらせよう、少なくとも戦争突入以前に人質を無事に取り戻そうとして、世界中の人々が、なりふり構わずフセイン大統領を「平和漬け」にした。フセイン大統領の方も、日本人人質家族を除いて、実にこまめにこれらの平和諸団体と会っていた。

フセインはいつ「決断」したのか

一二月四日早朝、フセイン大統領の親愛なる兄弟達、フセイン・ヨルダン大統領、アラファト・

（五面につづく）

（四面よりつづく）

パレスチナ大統領、アリ・イエメン副大統領の一行が、続々バグダッド入りをした。昼食会合、晩餐会と、「ミニ・サミット」を開催して「平和的解決策」を討議した。

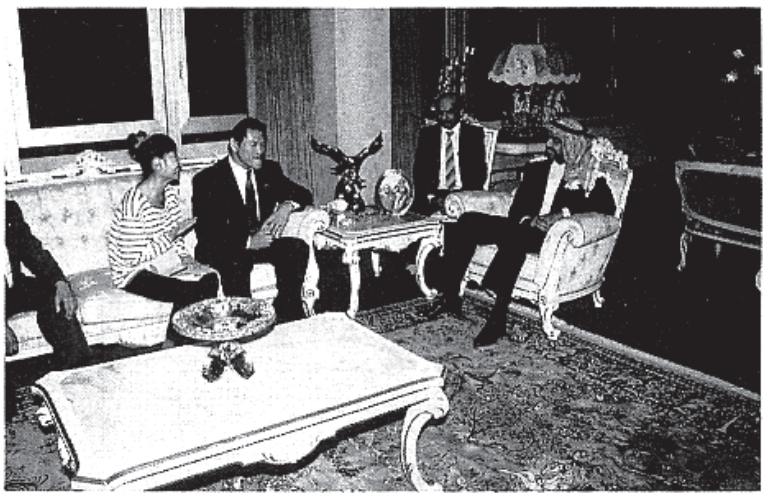
そして、イラクで最高指導者と呼ばれるフセイン大統領は、五日、RCC（革命評議会）のメンバーとバース党地区指導者を一同に集め、「決断」の承認を得たと言われている。

しかし、フセイン大統領の決断は、それより少し前に下されていたように思える。

一二月三日、人質解放窓口と言われていたサレハ国会議長に会った時のことだ。

猪木議員らに日本人人質を要求されて、「三週間以内、或いはもっとずっと早い時期に人質解放はありうる」と回答した。もう決まっているのになんでそんなにせっつくんだ、と言わんばかりの、余裕あるサレハ議長の応対ぶりが思い出される。そして、「薬とミルクが欲しい」と逆に要求された。

文化情報相ジャシム氏との会談も同じ反応で、余った時間を埋めるため、延々と「クウェートはイラクだった」という歴史講義をする始末……。



ウダイ・オリンピック協会会長と

この、女っぽいインテリアは？

しかし、同じ日の夜八時、最後に会見したフセイン大統領の長男、ウダイ・イラク・オリンピック委員会会長のところには、この情報が届いていなかったようだ。

「人質は一二月二五日から三月二五日の間に解放されるのだから心配いらないよ。それよりもっとフランクに、友人同士の話をしようよ」と、部下に米国製葉巻を運ばせ、火をつけさせた。

「実は、父と違ってぼくは政治に向いてないんだ……」。米国ロックシンガーのクリスチーナ嬢も同席させ、書棚のガラスを鏡にして、カフィーヤ（アラビア男性の被り布）の形を整えてみたり……。

「今度は日本のサケを飲みかわしながら語り合おう」と、イスラム教徒らしからぬ別れの挨拶をするウダイ氏。そのウダイ氏を取り巻く絹張りの豪奢な椅子、きらびやかな調度品、高級ペルシャ絨毯……。「はて？この女っぽいインテリアはどこかで見た様な？」。なんと、ウダイ氏の趣味は、喧嘩相手の一人であるアラブ首長国連邦のある王子の接客室のそれと、そっくり同じだったのである。

（つづく）

社説

眼を世界へと向け、かつ地域から力を作り出そう

ラテン・アメリカの二つの出来事

昨年末、商業紙の国際面に二つの出来事が掲載された。一つは、コロンビアの憲法制定議会選挙で、昨年三月に合法政党に転換した元左翼ゲリラ組織M19（四月一九日人民革命運動）が、二つの保守党を抑え、第一党になったという記事。もう一つは、ハイチの大統領選挙で、反米左派である「改革と民主主義の国民戦線」から立候補した「解放の神学派」の神父、アリスティド候補が当選を確実にしたという記事である。

前者については無視した新聞の方が多く、後者については、そこそこ大きく報道されはしたものの、いずれも湾岸危機の陰に隠れ、人々の注目を引くことはなかった。が、アメリカが自らの中庭と豪語してきたラテン・アメリカにおけるこの二つの「事件」は、ある意味では「湾岸危機後の世界」を象徴する出来事だったのではないかと思う。

東西対立から南北対立の時代へ

昨年一年、既成社会主義の崩壊に続くイラクのクウェート侵攻、米軍のサウジへの展開、東西ドイツの統合等々、世界状勢は揺れに揺れた。第二次世界大戦後の世界の枠組みが、冷戦の終結によって根底から崩れ去り、新たな世界秩序の形成へ向けた激動の時代が――国家間で、民族の間で、そして、国家と人民の間で、新たな世界へのヘゲモニーをめぐり、熾烈な闘争が展開される時代が始まったのである。

帝国主義諸国は、東西の壁崩壊を「資本主義の勝利」と宣言し、「世界秩序の憲兵」を気取るアメリカは、イラクの侵攻を口実にベトナム戦争以来最大規模の米軍を、華々しく湾岸に派遣した。しかし皮肉にも、その派兵自体が、アメリカの虚勢を暴露しつつある。拳を振り上げては見たものの、自らの拳の重圧に耐えかね、ただでさえ疲弊していたアメリカ経済は、瀕死の状態に直面しているのだ。

その意味では、イラクのクウェート侵攻は、東西対立に代わり、再び南北対立が浮上する時代を予感させるものであった。東西緊張緩和が、一面では、第三世界への収奪の構造を問わずに進行している以上、それは必然であり、今後その傾向は一層強まることになるだろう。

世界各地の闘いが共通の課題を

激動の波は当然日本をも直撃し、世界の中での日本の現状と問題を改めて浮き彫りにした。問われたのは、第三世界の資源の収奪の上に成り立つ日本の「豊かさ」である。そして、政府・自民党の答は自衛隊の海外派兵であった。しかもそれは、ひたすらアメリカの御機嫌を伺い、その無法な圧力に屈することによって出されたのである。

「国連平和協力法」は、一旦は廃案になった。しかし、自民党は「国連平和維持活動」を名目に、新たな海外派兵への策動を強めている。安保体制に固執する日本の支配層には、アメリカと共に自らの権益を武力で維持する道しか思い浮かばないのだ。その結果がどうなるかは、今眼の前でアメリカ自身が演じていることを見れば明らかだろう。

私たちはこの間、様々な個別の課題、運動を通じ、「金と物質的な豊かさ」に毒された私たちの生活を問い返す闘いを蓄積してきた。その力は未だささやかなものにすぎない。しかし今、私たちは、自らの生活を問うことが、世界の状況に直接関っていることがはっきりと見えるような時代を迎えつつある。そしてそれは、世界各地の闘いと私たちの闘いが、共通の課題で結びつき得る可能性が大きくなっていくことをも意味している。

一九九一年、今年も世界は大きく揺れ続けるだろう。私たちは、目先の出来事に一喜一憂することなく、眼をしっかりと世界に向けながら、かつ具体的な力を、地域から、身の回りから創り出していくことに全力を傾けるつもりである。

情報ひろば

●関西

▼反戦ドタバタ会議旗開き

1月13日（日）午後2～5時／日本の軍縮・在日米軍の撤退への大きなうねりを／ドタバタ事務所（京都大学YMCA会館2F）／連絡☎075－752－1426

▼ニカラグアの真実を語る

1月15日（祝）午後6～9時／ミゲル・デスコト前外相を囲んで／大阪府立労働センター（天満橋）／500円／連絡、ラテンアメリカ学習講座☎0726－37－3644（小林）

▼食品公害セミナー

1月23日（水）午前10時～／保田茂（神戸大農学部助教授）「米の自由化論議」をめぐって／2月27日（水）午前10時～／中南元（環境監視研究所所長）「輸入食品の安全性」をめぐって／3月27日（水）午前10時～／保田茂「有機農業の規格基準」をめぐって／神戸学生青年センター（阪急六甲）／400円／連絡☎078－851－2760

●関東

▼下北半島を愛する学習会

1月12日（土）午後7～9時／鈴木敏嗣「青森知事選を中心に現状報告」／東京代々木八幡区民会館／連絡☎03－485－8506

▼埼玉県に非核平和宣言を請願署名街頭行動

1月13日（日）午後2時半～4時／大宮駅西口／連絡、埼玉非核平和交流会☎048－834－1201

▼91パレスチナ子どもの集い

1月13日（日）午後3時～／現地報告と懇親会／日本キリスト教会館／1000円／主催、パレスチナ子どもキャンペーン☎03－205－6824

●各地

▼いま、フェミニズムに学ぶ

1月9日（水）午後6～9時／水谷千鶴子「性役割を超えて」／石川県教育会館／連絡☎076－2－91－4977

よ・ん・で・み・ま・せ・ん・か！

1週間のニュースを要約し、短かいコメントや解説をつけて

News Letter

現代をつかむ人のためのニュースファイル

毎週金曜発行、A4版、8～12ページ
購読料＝月2,000円（送料共）
申込み＝人民新聞社・大阪市北区天満橋3-5-28天満橋会館2F
☎06-358-4376 郵便振替 大阪2-109084 渡辺政治経済研究所

小集会/会議に最適（20名まで）

時間制限なし（宿泊はできません）

1人1時間100円の低料金

（ただし7人以下の場合は7人分、3時間以下の場合は3時間分の料金とします）

天満橋会館 会議室

▶お申し込み／お問い合せは◀

☎06-358-4376 人民新聞社まで

（国鉄大阪環状線天満駅より徒歩3分）

言わせて聞いて

市役所で課長になるのに三〇〇万円!?

大阪・K

一二月五日号一面に、大阪市職が全港湾阪神支部の藤本委員長を名誉棄損で告訴した記事が掲載されていましたが、具体的でとても面白いと思いました。

ところで先日、大阪府下の自治体に努める知人を訪ねたところ、自治体人事の現状についてぼやきにぼやいていました。彼の言うところによると、今や、管理職になるためには金を使いまくる必要があって、課長になるのには三〇〇万円くらいかかるそうです。もちろん上司に気にいられるための「接待費」ですが、そのために、誰が見ても首をかしげざるを得ないような人事が横行しているとか。

情実人事は市の管理職だけでなく、もう一つ大きいのが、議員のコネによる採用で、特にひどいのが公明党。管理職や議員の親戚やら息のかかったのがウジャウジャいて、そうした関係を熟知せずに、うっかり噂話や悪口でも言おうものならエライことに。おかげで職員同士でも、奥歯にものがはさまったような話しかできないそうです。

知人は退職まであと二年、その間はしょうがないから黙って我慢しているけれども、退職したら知っている話、見た話を全部暴露してやると息まいていました。

大阪市で公費乱用事件が大問題になっていますが、この問題でも、足下の市職の反応は極めて鈍いようです。淀みきった雰囲気は外から風通しをよくするしかないのではないかと思います。貴紙でも積極的に取り上げてください。

今最も求められている出版だと思います

東京・N

「オルタナティブな社会主義へ」、送っていただきありがとうございました。ざっと拾い読みしてみましたが、この種の出版は、今最も求められているもののひとつではないかと思います。

二一世紀の半ば以前に、おそらく「オルタナティブな社会主義とは」という問題が世界的に問われる時が来るのでしょう。今のところ、ソ連、東欧、特に東欧で「社会主義」が悪の代名詞のように使われるのは、歴史的にみてやむを得ない気がします。ともかく、唯一の処方箋にみえる資本主義へ向けて、突っ走り、大きな動乱と混乱をかいくぐって壁にぶち当たるのが、一〇年後あるいは二～三〇年後でしょうか。

そこから新しいスタートが始まると考えています。

確証もないのに犯人扱い

宮崎・S

えん罪事件の「甲山裁判」に興味があります。保母の園児「殺し」といった常識的でない「犯罪」に、当然の疑問を持ちました。一九七四年の発生らしいが、検察側の執念深さには驚きました。山田さんを有罪にしようと必死なんですからね。山田支援の輪が次第に拡大したのも、わかる気がします。

近ごろ、愛妻三人が心臓マヒ死をしたため、疑惑の人と騒がれている「トリカブト疑惑」は、確証もないのに犯人扱いをする悪癖が直っていないのです。山田保母の

チェルノブィリ原発事故は年月と共に被曝実態が深刻化し、またセラフィールド、ラ・アーグ再処理工場の労働者やその周辺住民も、白血病や癌の恐怖にさらされています。日本では青森県六ヶ所村で、核燃料サイクル施設の無謀な建設が県民合意の無いまま強硬に押し進められています。

一九八五年四月九日、北村青森県知事と当時の県議会は、受け入れを決定し、基本協定を結んでしまいました。それに対し私たちは、「核燃白紙撤回」を求めて、署名・抗議文提出・裁判等あらゆる手段を講じ、県内外の人々と共に闘ってきました。その活動は県内に次第に浸透しつつあり、一一月のマスコミ世論調査結果の発表によると、県民の六二%もの人々が核燃反対の意思をはっきりと表明しています。しかし、北村知事は国策の名のもとに推進の立場を変えようとしません。

現在、六ヶ所村現地では、すでに濃縮ウラン工場がほぼ完成し、来春五月の営業運転をもくろみ、去る一一月一五日には低レベル放射性廃棄物処分場へ国の許可が下り、一一月三〇日に着工しています。

「県知事をかえ、立地基本協定を破棄しなければ」――核燃の白紙撤回を求める県民の声の高まる中で、衆参両議員選挙で圧倒的勝利をおさめた労農提携を三たび実現し、県知事選で勝利するためにと、県内の反核燃各団体は候補者の選考を農業者に一任しました。その結果、共同行動代表の金沢茂氏が擁立されたのです。

選挙母体は、参院選で三上隆雄さんを勝利に導いた「いのちと大地を守る会」（農業者が中心となって組織されている）となり、労・市民団体も加わった形で選挙対策本部が組織されました。市民団体は共同行動のメンバーを中心に「金沢茂と共に核燃を阻止する会」を結成し、選対本部と協力体制を組みながら、反核燃の一票でも多い掘り起こしに全力をそそぎ、「核燃白紙撤回！金沢茂県知事」実現のために最後まで戦いぬきます。

「核燃とまれば原発とまる」――知事選に勝てば核燃は阻止できます。反核燃知事誕生のために県内外の方々の大きなご支援とご協力を心からお願いいたします。

【連絡先】青森市本町2－11－13反核燃青森事務所内☎0177－23－5444（FAXも同じ）

【カンパの送り先】郵便振替・盛岡6－28230・金沢茂と共に核燃を阻止する会

みんなの力で反核燃知事を誕生させよう

金沢茂と共に核燃を阻止する会

人民新聞に言えと

政治主体形成をともに

京都・I

見本紙お送りいただきありがとうございます。「人民新聞」は、組合で購読しており、情報や資料ばかりではなく、変革を展望する綱領的立場を築くうえでも大変貴重な出版物の一つとなっております。

左翼主体の再生、「赤と緑の連合」の新しい政治主体形成のために共に頑張りましょう。

「永井啓之獄中書簡」

東京・H

「仁王のように立ちて――永井啓之獄中書簡」が社会評論社から出版されています。この本が出版されていることを知らない人も多いと思います。お知らせまで。

天皇儀式は大笑いだった

広島・S

いつも送って下さって有り難うございます。

私、最近、病気のためものを書いたりするのが難しいのです。文章送れなくてすみません。

天皇儀式は大笑いだったよな。あれだけのケイビやっても、ゲリラやられて。パレード見にくる人は少ないし。町に日の丸は出てないし。

私も花柳幻舟さんの様に爆竹投げたかったぜ！

しかしマスコミは、天皇報道はガンガンするくせに、反対派の行動、主張はほとんどとりあげない。「大本営発表」だよな、まるで。ゆるせんよ。

せっかくの御案内ですが…

東京・W

見本紙拝読致しました。御活動に敬意を払っております。

私もいくつかの活動に首を突っ込んでおりますが、金銭・時間の両面から思うにまかせない状態にあります。手を拡げすぎて経済的負担に音をあげてしまったり、逆に名ばかりのメンバーで活動には参加できず、自身の活動に支障がでたり…。こうした事情から、せっかくの御案内ですが、購読を見送らせていただきます。

今後の貴紙の一層の発展を祈っております。

カンパご協力ありがとうございました

＊京都I千円＊名古屋S二千円＊京都T二万円＊大阪O五百円＊京都K二千二百円＊大阪O五千円＊大阪H二千円＊高知T四千円＊神奈川K二万円＊大阪Y二万円＊大阪M二千円＊大阪I五千円＊埼玉N二千円＊大阪N五万七千円＊大阪T二万円＊大阪H六千三十一円＊千葉M二千円＊大阪O六千円＊大阪A一万円＊大阪M一万円＊神奈川I千円＊大阪J二万円＊大阪I十万円＊大阪K二千二百円＊大阪Y五千円＊大阪S七千円＊大阪I三万円＊大阪K二万円＊大阪K五万円＊兵庫H二万円

（12月23日現在）

合計五十九万三千三百二十八円

いま語っておくべきこと

川島豪・塩見孝也　対談

70年代の学生運動・新左翼運動をリードした元京浜安保共闘議長・故川島豪（旧臘九日逝去）と元共産同赤軍派議長・塩見孝也が激論、憂論、憤論！連合赤軍事件などの革命的左翼運動の総括、朝鮮民主主義人民共和国の現状等をふまえ、現代資本主義と社会主義の今後を展望する。川島豪の遺稿となる。46判2060円

目次　チョソンで感じたこと／朝鮮と中国の違い／民主主義と人民の自発生／思想の原点はなにか／継続革命の必要／階級構成とプロレタリアートの変化／世界の現状と中東問題／連合赤軍をめぐって／超えられていない連合赤軍問題／階級的責任のとり方　ほか

封建社会主義と現代

塩見孝也獄中論文集

元共産同赤軍派議長獄中18年の論文集。現代社会主義国家論、連合赤軍事件総括批判、「農地改革」農業問題、西田幾太郎論、女性解放運動論など8論文。（解題＝高沢皓司）2060円

赤軍ドキュメント

査証編集委員会編　一九六九年に結成されて以来、共産同赤軍派が展開した死闘の全歴史過程を再現する。"戦闘のクロニクル"は、七年間にわたる闘いが遺した手稿の集成であり、派打つ闘いの雄叫びを伝え、"連赤裁判"の経過で、十年後の連合赤軍を活写する。2884円

銃撃戦と粛清

森恒夫「自己」批判書

雪の山岳ベースに失われた革命の真実を、死の直前まで獄中で書きつづけた、連合赤軍の最高指導者森恒夫の手記、全文六〇〇枚。控訴審を期して初めて公開される―山岳ベースでの事実の再現／我々の誤り／連合赤軍への道の一部で構成される。

高沢皓司解説　2060円

戦後革命運動事典

同編集委員会編　45年8月15日を起点とし80年代の今日に及ぶ革命運動――政治、社会、労働、農民、学生、市民の各運動をとりあげ、その思想、組織、事件、人物を、四五六項目で解説する。基礎文献資料として、人民に訴う他一の綱領・宣言と関係年表、社共、新左翼の系譜を付す。　46判410頁3200円

全共闘グラフィティ

高沢皓司編　67年秋から70年にかけて、一挙に噴出し造反有理、大学解体をスローガンに、ついには自己否定にまで過激に行きついた全共闘運動を丸ごと捉えた写真集。増補重版！　B5判2060円

東京都文京区本郷2－15－20
振替　東京7－160936
電話03・3812・1662

新泉社